

一年をとおした0歳児の発達と保育室の使われ方の関係

The Relationship between the Development of Infants and
How Nursery Rooms Are Used throughout the Year

住居学科

近藤 ふみ

定行まり子

Dept. of Housing and Architecture Fumi Kondoh

Mariko Sadayuki

抄 録 本稿では、0歳児の心身の発達と保育室の使われ方の関係に着目し、0歳児保育室に必要な物理的環境について考察する。調査対象は2か所の保育所の0歳児クラスとし、保育所における一日の生活を一年間にわたり詳細に観察した。その結果、クラスを構成する子どもの発達段階は、空間の使われ方に大きく影響していることが明らかになった。結論として、0歳児保育室には、①一年をとおして食事・午睡・遊びスペースをそれぞれに確保する必要がある、②遊びスペースの一部に「ほふく前児」が安全に横になれるスペースを確保する必要がある、といえる。今後は、食事・午睡・遊びスペースどうしの位置関係や、保育室と調乳室・沐浴室との関係についても明らかにする必要がある。

キーワード：保育所、保育室、0歳児、発達

Abstract In this paper, we consider the physical environment from the view point of the relationship between the development of infants and how nursery rooms are used. We observed infants in detail during their stay in nursery rooms throughout the year. It was shown that the developmental stages of children have a significant impact on the use of space. In conclusion, it was found that ① enough spaces are needed for eating, napping and playing, respectively ② there should be a safe space for resting/sleeping as a part of play rooms.

Keywords : day nursery, nursery room, zero-year-old child, development

1. 研究の背景と目的

近年、女性の社会進出による共働き世帯の増加とともに、保育所の需要は高まり続けている。厚生労働省によれば、保育所の施設数・定員・利用児童数は、いずれも前年より増加しているものの、待機児童数（認可外保育施設利用者や家庭福祉員利用者などは除く）もまた前年より増加しており、そのうち82.0%は3歳未満児である。就学前児童全体のうち、3歳以上児の約4割は保育所、約4割は幼稚園に通っていることから、特に3歳未満児の保育の場を整備する必要があるといえる。

保育所の環境の水準は、児童福祉施設最低基準（以下「最低基準」とする）により、2歳未満児については乳児室（1人あたり1.65m²以上）または

ほふく室（1人あたり3.3m²以上）、医務室、調理室および便所を設けること、と規定されている。2歳未満児のなかでも0歳児は特に心身の発達が未熟であり、生活リズムの個人差が大きく、食事（授乳）・睡眠（午睡）・遊び（ほふく）・排泄（おむつ交換）・着替えなどのさまざまな行為を一人ひとりに合わせて行う必要がある。そのためには保育室に十分な広さが必要であり、調乳や沐浴のための設備が必要である。

本稿は、0歳児の心身の発達と保育室の使われ方の関係に着目し、0歳児保育室に必要な物理的環境について考察する。一年をとおした保育室の使われ方の実態を詳細に把握し、個人の発達段階や、クラスを構成する子どもの発達段階による保育室の設えの変化を明らかにする。その上で、今後の保育所整

備のための基礎的資料を作成することを目的とする。

2. 調査概要

2.1. 調査対象施設および保育室の概要

調査対象施設および保育室の概要を表1に示す。Sk 保育園は、0歳児クラスのみを0歳児保育室で保育している。Ss 保育園は、0歳児クラスと1歳児クラスを0, 1歳児保育室で保育している。L字型のワンルームに各クラス用の食事・午睡・遊びスペースが配置されている。0歳児クラスの子どもが1歳児クラス用の食事スペースで食事をするなど、一人ひとりの発達に応じてきめ細かい対応をすることができる。

2.2. 調査方法

2009年5月に各施設1回の予備調査を行い、保育室の内法、家具・収納・設備の寸法などを計測した。また、観察調査を行い、保育室のゾーニングや空間の使われ方の特徴を把握した。その後、本調査として、2009年6月から2010年3月にかけて毎月1回、計10回の終日観察調査を行った。

①行動場面の観察

保育室における活動を図面への記入とデジタルカメラでの撮影により記録した。10分ごと、行為の切り替わるタイミングごとに、子ども一人ひとりについて保育室内のどの場所で何をしていたかを記録

した。

②セッティングの計測

セッティングはクラスを構成する子どもの発達や、その日の保育内容によっても変化することから、調査日ごとに家具・収納の位置、コーナーの面積などを計測した。

③調査時間

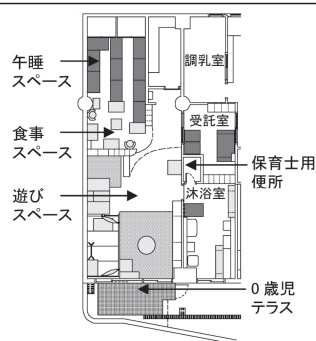
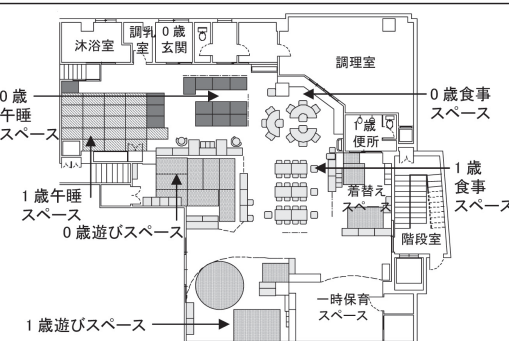
観察調査は、午前9時から午後5時のうち、保育スケジュールの午睡時間以外の時間帯に行った。計測は、毎月の観察時間内のうち、保育スケジュールの午睡時間および外遊びなどで子どもが室内で活動していない時間帯に行った。

2.3. 移動方法による発達段階の分類

本稿では0歳児の発達と保育室の使われ方の関係を明らかにするため、観察調査に基づき、移動方法による発達段階の分類を行った。主な移動を歩行で行う段階を「歩行児」、ほふくで行う段階を「ほふく児」、移動しない段階を「ほふく前児」とした。

調査日に出席した子どもの発達段階別人数を図1, 2に示す。Sk 保育園(図1)をみると、6～10月は歩行児からほふく前児まで、11～3月は歩行児とほふく児が出席している。Ss 保育園(図2)をみると、6～10月と2月は歩行児からほふく前児まで、11～1月と3月は歩行児とほふく児が出席している。これは2月にほふく未満児が入所したことによる。

表1 調査対象施設および保育室の概要

施設名称	Sk 保育園	Ss 保育園
所在地	東京都新宿区	東京都新宿区
運営形態	公設公営・認可保育所	民設民営・認可保育所
保育室面積	67.419 m ² (0歳児保育室)	198.534 m ² (0,1歳児保育室、一時保育スペースを含む)
定員	0歳児:10名	0歳児:15名, 1歳児 20名
平面図		

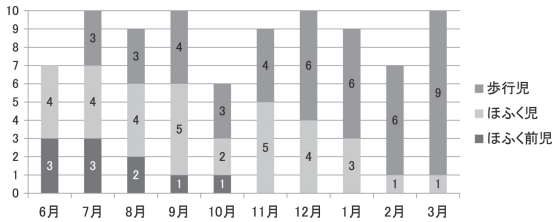


図1 調査日に出席した子どもの発達段階別人数 (Sk 保育園)

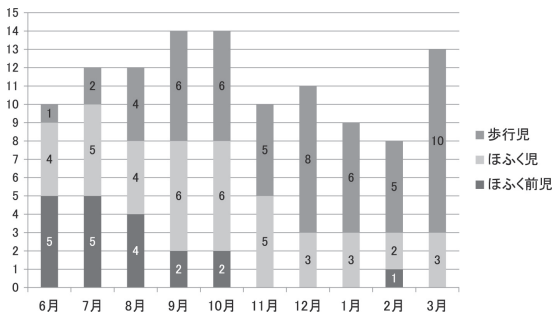


図2 調査日に出席した子どもの発達段階別人数 (Ss 保育園)

3. 子どもと保育士の居場所からみた食事・午睡・遊びスペースの使われ方

行動場面の観察記録に基づき、歩行児・ほふく児・ほふく前児が出席している7月と、歩行児・ほふく児が出席している3月の食事・午睡・遊びの場面を取り上げ、子どもと保育士の居場所を平面図に記入した。各スペースの使われ方の実態を明らかにするとともに、個人の発達段階や、クラスを構成する子どもの発達段階による保育室の使われ方の変化について考察する。

3.1. 食事時のスペース使われ方

7月と3月の食事の場面における子どもと保育士の分布を図3に示す。食事スペースは、午前おやつ、昼食、午後おやつの際に使われる。離乳していない子どもは食事スペースで離乳食を食べ、そのままミルクを飲むか、あるいは、午睡スペースの近くに置かれている授乳用の椅子や遊びスペースに移動する。図3は、月齢の高い子どもの食事の場面を取り上げている。4～5人の子どもが食事をしており、子ども2～3人に保育士1人が付いて食事の介助

をしている。

Sk 保育園の食事場面の写真をみると、子どもは椅子座、保育士は床座である。保育士の傍には配膳ワゴンが置かれている。

Ss 保育園の食事場面の写真をみると、0歳児食事スペースでは高い机と椅子、1歳児食事スペースでは低い机と椅子が使われている。Ss 保育園の0、1歳児保育室には0歳児クラスと1歳児クラスの子どもがおり、自分でスプーンなどを使えるようになった子どもは1歳児食事スペースで食事をしている。

月齢の高い子どもが食事をしている間、月齢の低い子どもは遊びスペースまたは午睡スペースにすることが分かる。各園の7月と3月の午睡・遊びスペースにいる子どもの人数を比較すると、Sk 保育園では6人から4人に、Ss 保育園では5人から1人に減っており、生活リズムの揃う過程を読み取ることができる。

3.2. 午睡スペース使われ方

7月と3月の午睡の場面における子どもと保育士の分布を図4に示す。午睡スペースは、保育スケジュールの午睡のほか、一人ひとりの生活リズムに合わせて行われる。図4は、月齢の高い子どもの午睡の場面を取り上げている。

Sk 保育園では一年をととして全員分のベビーベッドが設置されている。しかしながら、月齢の低い子どもや布団で眠る練習をしている子どもは遊びスペースのサークルの中に布団を敷いて寝ている。また、サークルの柵を利用してハンモックを設置しており、この中で眠る子どももいる。

Ss 保育園は、保育スケジュールの午睡以外の時間に眠らなくなった子どものベビーベッドを片付けることにより、1歳午睡スペースを広く使えるように工夫している。1歳午睡スペースは、1歳児クラスの遊びスペースとしても使われている。

ベビーベッドは、睡眠時間の長い低月齢の子どもが、保育スケジュールの午睡以外の時間にも安全に十分に眠るためには適しているといえる。しかしながら、発達段階が進むにつれて布団で眠るようになることから、ベビーベッドを収納するためのスペースを保育室内または施設内に確保することにより、午睡スペースに隣接するスペースを広く使うことができ、クラスを構成する子どもの発達に適した環境を整えることができるといえる。

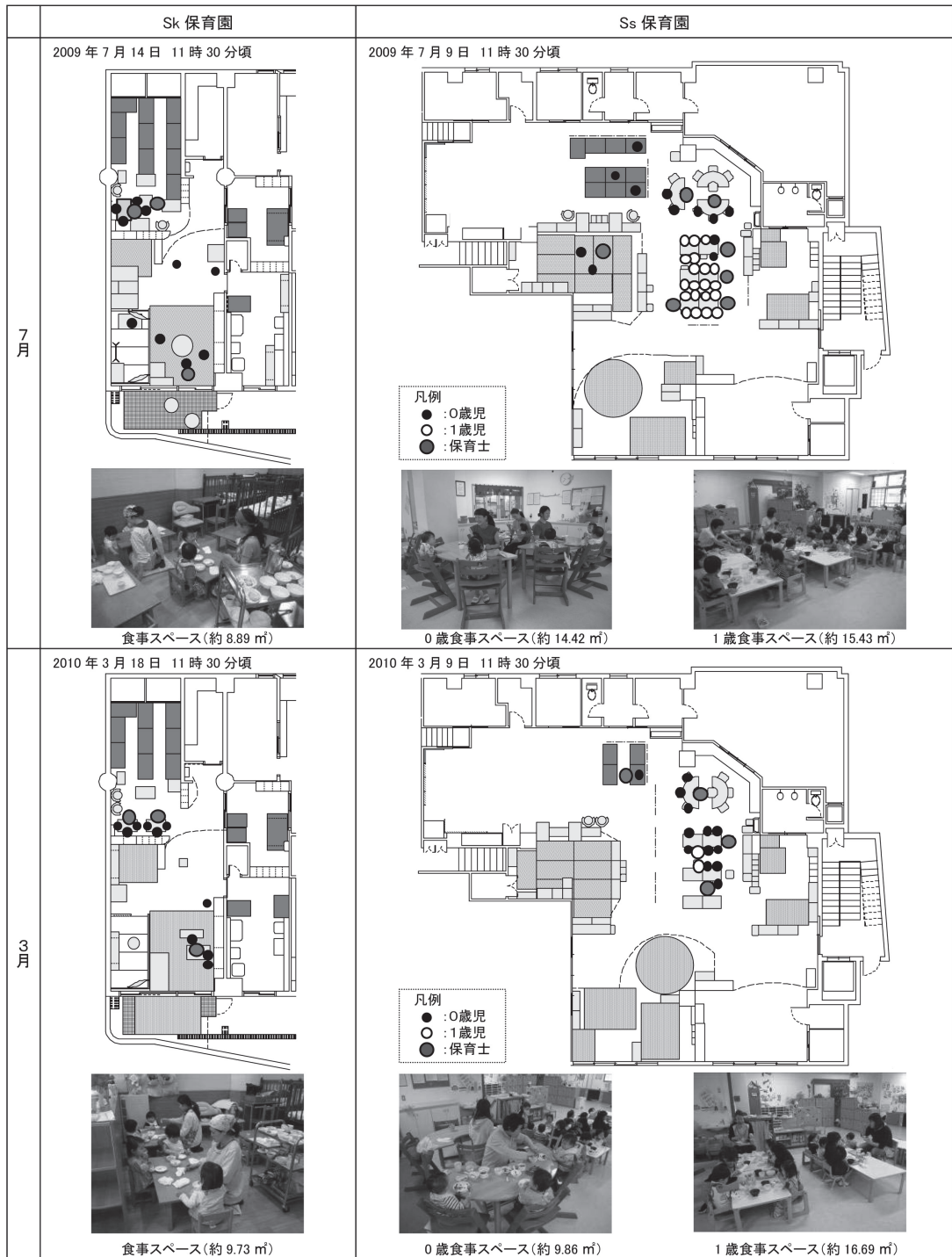


図3 食事時の保育室内の子どもの分布

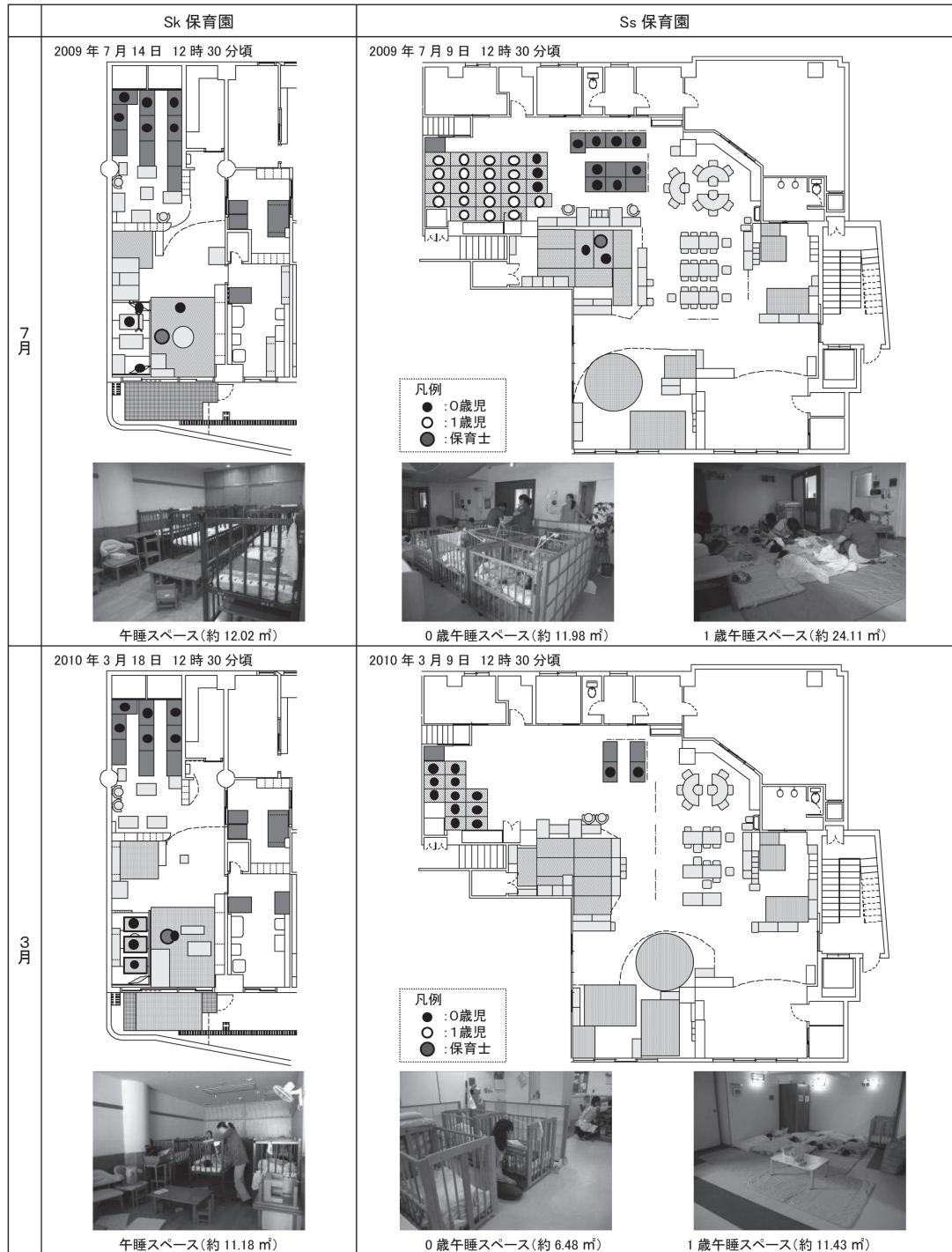


図4 午睡時の保育室内の子どもの分布

3.3. 遊びスペース使われ方

7月と3月の遊びの場面における子どもと保育士の分布を図5に示す。

Sk 保育園の遊びスペースは0歳児専用テラスに面しており、窓枠をカバーする、敷物を敷くなどのセッティングがされると、歩行児だけでなく、ほふく児も自由に出入りして遊んでいた。また、遊びスペースの一角にサークルで囲まれた畳スペースがあり、ほふく前児が安全に遊んだり眠ったりできるように工夫されている。また、午睡時には布団を敷いて眠る場面も見られた。7月と3月を比較すると、7月にはほふく未満児の居場所として、3月には全員のあそびスペースとして使われる場面が多く見られた。

Ss 保育園では、ほふく前児とほふく児は0歳遊びスペースで、歩行児は1歳遊びスペースで遊ぶことができる。0歳遊びスペースと1歳遊びスペースは、0歳児が立ち上がると向こう側が見える程度の高さのパーティションで仕切られており、つまり立ち段階の子どもが興味津々な様子で1歳遊びスペースを眺めている場面が多く見られた。7月は12人中10人が0歳遊びスペースにいるが、3月になると13人中10人が1歳遊びスペースで遊んでいる。一方で、1歳児クラスの子どもの0歳遊びスペースに入って遊ぶ場面も見られた。0歳遊びスペースは1歳遊びスペースよりも使用人数が少なくゆったりしていること、遊具が1歳遊びスペースとは異なること、保育士に甘えられることなどが理由ではないかと推察される。

4. 時間と行為からみた食事・午睡・遊びスペースの使われ方

行動場面の観察結果に基づき、保育室内を食事スペース・午睡スペース・遊びスペースに分け、各スペースの使われ方と行為を整理した。子どもが1人以上かつ10分以上滞在している場合に、そのスペースが使われていると判断した。保育士のみが準備・片付け等をしている場合は含めないこととした。行為は、基本的な生活行為である食事（授乳）および睡眠（午睡）と遊び（ほふく）の3種類に着目した。

歩行児・ほふく児・ほふく前児が出席している7月と9月、歩行児・ほふく児が出席している12月と3月について、考察する。

4.1. 各スペースの使用時間と行為

Sk 保育園（図6）をみると、食事スペースは、午前のおやつから昼食までと午後のおやつ時間帯、午睡スペースは午睡の時間帯に集中して使われており、遊びスペースは一日をとおして使われている。また、食事スペースでは主に食事、午睡スペースでは主に睡眠が行われており、遊びスペースでは遊びの他に睡眠も行われている。

Ss 保育園（図7）をみると、食事スペースでの食事、遊びスペースでの遊びはSk 保育園と同様の傾向がみられる。午睡スペースの睡眠はSk 保育園よりも長く、遊びスペースでの睡眠は行われていない。また、短時間の滞在・行為が多く、食事スペースにおける遊び、午睡スペースにおける遊び、遊びスペースにおける食事がそれに該当する。食事スペースにおける遊びは、1人の保育士が2～3人の子どもの食事の介助をするため待ち時間が発生していること、座面の高いタイプの椅子を使用しているため自分で椅子を下りて遊びスペースに移動することができない状況にあることが影響している。午睡スペースにおける遊びは、ベビーベッドでのひとり遊びを指す。午睡スペースとほふくスペースが隣接していることから、保育士はほふくスペースにいながらベッド内の子どもの見守りを行いやすいこと、ほふくスペース内にサークルなどで囲われたスペースがないため、ほふく児とほふく前児がそれぞれ自由に安全にあそぶことができる環境を確保するためではないかと推察される。

4.2. 一年をとおしてみた使われ方の変化

使われ方の変化として、いずれの保育園でも、7月には滞在しているスペースにも行為にもばらつきがみられるが、3月になるとまとまりができていく様子を読み取ることができる。食事・午睡・遊びスペースのうち2スペース以上が同時に使われている状況は、一年をとおして見られるものの、クラス人数が多く、生活リズムの個人差が大きい場合ほど、複数のスペースを同時に使い、かつ、その時間も長い。朝と夕方以外の時間帯は2スペース以上が使われており、特に食事から午睡にかけて時間帯や午睡明けの時間帯には3スペースが同時に使われている。

Sk 保育園の遊びスペースにおける睡眠について、7月から3月までの変化に着目すると、7～9月は

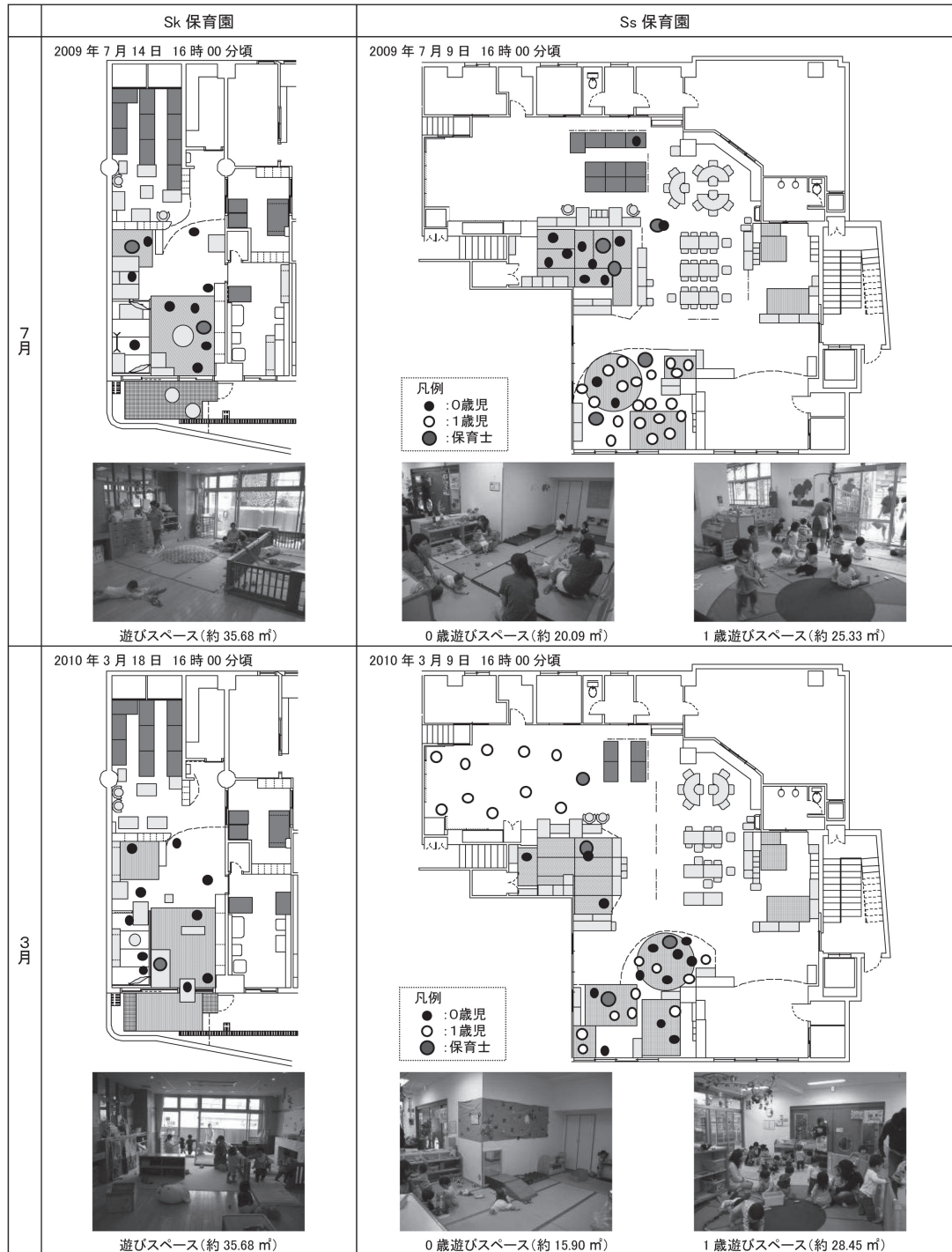


図5 遊び時の保育室内の子どもの分布



図6 食事・午睡・遊びスペースの使われ方と行為 (Sk 保育園)

午睡時間後にも遊びスペースで眠っている子どもがおり、その時間は徐々に短くなっていることが分かる。3月になると午睡時間後に遊びスペースで眠る子どもがいなくなる。

Ss 保育園は、ほふく前児がいなくなったことから午睡スペースでの遊び行為がなくなり、授乳中の子どもがいなくなったことから遊びスペースでの食事行為がなくなっている。

5. まとめ

本稿は、0歳児の心身の発達と保育室の使われ方の関係に着目し、0歳児保育室に必要な物理的環境について考察した。空間の使われ方を明らかにするため移動方法に着目し、発達段階を「歩行児」「ほふく児」「ほふく前児」の3段階に分類した。



図7 食事・午睡・遊びスペースの使われ方と行為 (Ss 保育園)

一年をとおして調査した結果、クラスを構成する子どもの発達段階は、空間の使われ方に大きく影響していることが明らかになった。遊びスペースにおいて一人ひとりの子どもが安全に十分に遊ぶことができるためには、移動方法による発達段階に着目して空間のあり方を検討する必要があるといえる。活発に動き回る「歩行児」と「ほふく児」の遊びと、動くことのできない「ほふく前児」の遊びがそれぞれに保障されるためには、遊びスペースの一部に「ほふく前児」が安全に横になれるスペースを確保することが有効である。

食事・午睡・遊び(ほふく)スペースが同時に使われる時間の長さは一日をとってみれば短い、生活リズムの個人差が大きい0歳児を集団で保育するためには、一年をとおして食事・午睡・遊びスペースをそれぞれに確保する必要があるといえる。

また、生活習慣の自立のために自分で遊びスペースから食事スペースに行くことができたり、クラスの大半の子どもが遊びスペースにいる時間帯にも午睡スペースで安全に睡眠をとることができるように、保育室内に食事・午睡・遊びスペースを設ける必要があるといえる。

今後は、保育室の設えや面積、クラス規模の異なる保育所を対象にした研究を進めるとともに、食

事・午睡・遊びスペースどうしの位置関係について、また、保育室と調乳室・沐浴室との関係についても明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は、平成21年度桜楓会奨学金による助成を受けて行われたものの一部です。ご協力いただきました関係者の皆様に深謝いたします。